ー７　豊かな湧水にみる歴史的風致

（１）はじめに

熊本市は水と緑が豊かな都市で、水道水源の全てが地下水で賄われているなど特に地下水に恵まれている。この地下水は阿蘇を源とする白川中流域の水田等から地下に染込んだ雨水が 15～20 年をかけて水前寺・江津湖地区などの湧水として地表に現れるものである。

熊本における湧水の象徴のひとつである江津湖は、加藤清正の治水事業の一環として造られた人造湖である。そして、この湖水に育まれた豊かな自然環境を求め、江戸時代から武士や一般庶民の行楽地として親しまれ、人々が漁や花火、舟遊びなどを行っていた。また、江戸時代には、湖畔に藩の御茶屋や藩主別邸、家老の下屋敷等が建てられ、明治から昭和初期にかけては料亭などが建ち並んでいた。

藩主や藩の家老などの別邸建物などはすでに失われているものの、その庭園は残されており、江戸時代に整備された「水前寺成趣園」は国指定の名勝及び史跡として多くの観光客で賑わう。また休日の江津湖畔では、豊かな自然環境のなかで思い思いに過ごす多くの家族連れの姿を見ることができる。

このように、水前寺・江津湖一帯は水前寺江津湖公園として整備されている部分もあり、現代においても多くの人々の憩いの場であり、豊富な湧水を中心とした良好な市街地環境が継承されている。

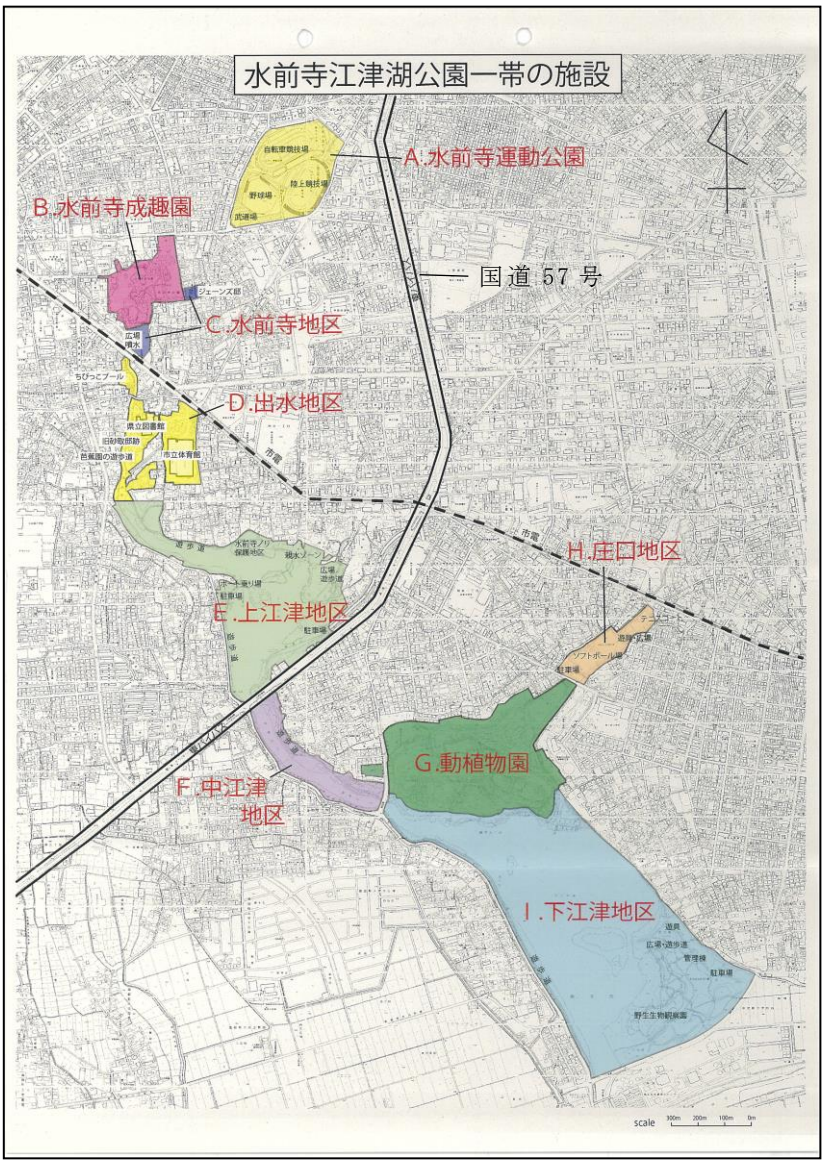
上江津湖全景

下江津湖全景

（２）水前寺江津湖公園について

水前寺江津湖公園は江津湖を中心とする都市公園で、昭和 35 年（1960）に上江津地区の 22.10ha が江津湖公園（総合公園）として都市計画決定された。その後、下江津地区・庄口地区の追加などの経過をたどり、昭和 57 年（1982）水前寺地区内の水前寺成趣園・熊本洋学校教師館ジェーンズ邸・夏目漱石大江旧居（第三旧居）を加えて、水前寺江津湖公園として区域及び名称が変更され、広域公園として平成８年（1996）に開設された。総面積は 126.9ha の規模となっている。

水前寺地区・出水地区・上江津地区を経由して下江津地区に到るまで湖岸沿いに遊歩道が整備されており、遊歩道沿いには江戸時代から残る水前寺成趣園をはじめとする庭園跡が残るとともに、希少な水辺植物が自生し、ホタルが飛び交い、冬には渡り鳥が羽を休め、四季折々の景観を楽しむことができる。



水前寺江津湖公園一帯の施設

（３）歴史的風致を形成する建造物等

①江津湖

現在の江津塘（下江津湖）

慶長６年（1601）、肥後国全体を治めることになった加藤清正は熊本城と城下町整備と同時に多くの治水・利水事業に取り組んだ。このうちのひとつに江津塘（清正塘）と呼ばれる堤防の築堤があったとされる。当時の江津湖付近はいくつもの河川が流れ込む土地であり、常に沼地のような状態であった。清正は流れ込む諸流を合流させて加勢川をつくり、そして右岸に堤防を築堤した。これによって、水前寺周辺の湧水が集められて江津湖が形成されるとともに、その西側一帯には多くの水田が出来上がった。

肥後文献叢書第二巻（歴史図書出版社、昭和 46 年（1971）７月 20 日発行）に収録されている『藤公遺業記』（天保３年（1832））に慶長年間（1596～1615）の出来事として、託麻郡今村より飽田郡野田村までの築堤と江津湖の形成によって新しい村が出来上がったことが記されている。

現在、国道 57 号を境に、北側が上江津湖、南側が下江津湖と呼ばれている。

②水前寺成趣園

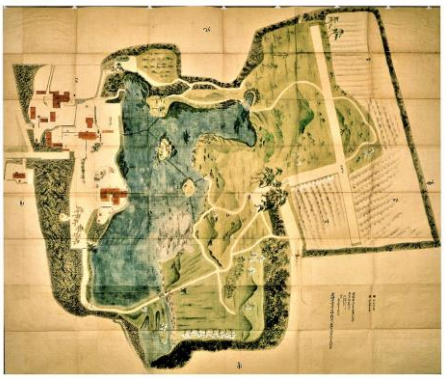
水前寺成趣園は熊本藩初代藩主の細川忠利が寛永 13 年（1636）に古市宗庵に命じて造らせた国府の御茶屋が始まりとされる。忠利はそこに寺をつくり、耶馬渓羅漢寺から玄宅を招いて住まわせ水前寺の号を与えたことから「水前寺の御茶屋」と呼ばれるようになった。その後３代藩主細川綱利のときに現在のような大規模な庭園として完成し、陶淵明の詩に因んで成趣園と名付けられ、現在まで県民・市民や観光客に親しまれている。寛文９年（1669）から正徳３年（1713）に書かれた『御奉行所日記』（永青文庫蔵）によると、寛文 10 年（1670）から寛文 11 年（1671）にかけて水前寺の大規模な普請が進められていたことが分かる。

桃山式の庭園で東海道五十三次を模し、阿蘇の伏流水を清冽な流れ

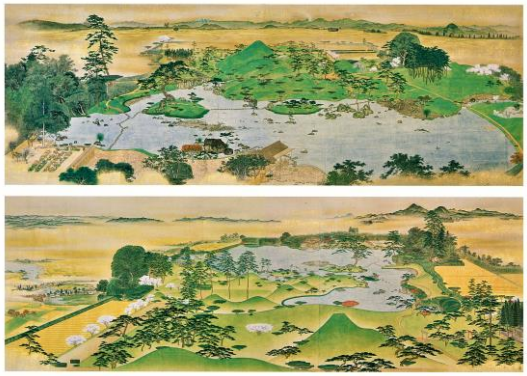
として活かした回遊式庭園で、昭和４年（1929）国指定の名勝及び史跡に指定されている。また、寛文 11 年（1671）ごろに茅葺の酔月亭が西側の池辺部に建てられたが、明治 10 年（1877）の西南戦争時に焼失している。

水前寺成趣園

水前寺成趣園
（古今伝授の間から望む）



水前寺御茶屋惣御絵図
（文化 11 年(1776)以後、永青文庫所蔵）



水前寺庭中之図
（江戸時代末期、永青文庫所蔵）

③古今伝授の間

古今伝授の間は水前寺成趣園の池に面して建つ茅葺の建物である。慶長５年（1600）、後陽成天皇の弟八条宮智仁親王が細川藤孝（幽斎）から古今集の秘伝を授けられた建物（部屋）で、これによって古今伝授の間と呼ばれる。

建物は主室と次の間のその東西に幅１間の縁座敷を設け、それに水屋などの付属部屋を設けている。主室は八畳で七尺の床と、床脇に向切の炉を構えた台目畳が加わり、次の間も八畳で東側に附書院がある。このように座敷飾りを主室に畳床、次の間に附書院と分離しているのが特徴である。主室の杉戸の雲竜図は狩野永徳作、襖絵の竹林七賢図は海北友松作といわれている。

明治４年（1871）に桂宮家から細川家に寄贈され、当時の古材等を再利用して、大正元年（1912）に移築された。桂離宮と並んで八条宮（桂宮）家の遺構として貴重であることから、昭和 38 年（1963）に熊本県の重要文化財に指定されている。

なお、大正元年（1912）10 月 19 日の九州日日新聞では「水前寺に移されし古今伝授の室　工事九分通り成る」というタイトルの記事が、建物の歴史的経緯や造りとともに、貴重な建物の再建が間近であることを伝えている。

古今伝授の間　全景

古今伝授の間　室内

④旧砂取細川邸庭園（旧江津花壇）

現在のくまもと文学歴史館と西側の加勢川とのあいだに湧水を利用した庭園が残っている。旧江津花壇庭園などと呼ばれ、水前寺成趣園とともにこの地域を代表する庭園の１つとなっている。

当初は廃藩置県で熊本城内の二の丸屋形（古京町邸）から転居を余儀なくされた 10 代藩主細川斉護の正室の顕光院の隠居屋敷として建てられた。その暮らしは『明治七年日記』に記録されている。一方、現存する庭園の飛び石や池の形などが『砂取御邸絵図』（明治７年（1874）、永青文庫所蔵）とほぼ一致しているので、造園当初の姿を現在までほぼ残しているといえる。

明治 10 年（1887）から細川一門の細川内膳家の屋敷となった。明治 40 年（1907）には料亭「勢舞水楼」が経営されており、大正 11 年（1922）以降は六車初次郎が借り受け、屋敷と庭園を利用した料亭「江津花壇」を経営した。昭和 17 年（1942）に三菱重工業熊本事業所の施設になり、昭和 23 年に料亭新茶屋が一時転入したのちに昭和 24 年（1949）に井関農機の保養所「江津荘」となった。昭和 60 年（1985）に熊本県立図

書館の敷地となり、現在は水前寺江津湖公園の一部として熊本市が管理している。

旧砂取細川邸庭園

砂取御邸絵図
（明治７年、永青文庫所蔵）

⑤芭蕉園

芭蕉園については、徳冨蘆花（とくとみろか）が『死の陰に』（大江書房、大正６年（1917）出版）に書いている。『死の陰に』は蘆花が大正２年（1913）に家族とともに九州などを旅した紀行文である。これによると、大正２年（1913）夏に家族と共に川下りを楽しんだことを書いており、そのなかで「*好い川だ。妻の父ではないが、この川添に水荘一つ欲しと思ふ。と思へば、芭蕉など植えた心憎い風雅の別墅が左岸に見えた*」と書いている。別墅とは別荘のことで、蘆花が訪れたころは、料亭「勢舞水荘」が経営されていた。

芭蕉園は明治時代末から大正時代初めに旧砂取細川邸庭園の南側に植えられた少しの芭蕉に始まり、その後、豊かな湧水などの成育に適した環境から現在の範囲に広がったものと思われる。

芭蕉園

⑥出水神社能楽殿

明治 11 年（1878）の出水神社の創建と同時に建立された能楽殿は昭和 40 年（1965）に焼失した。その後、昭和 60 年（1985）に八代（やつしろ）松井家から能舞台が寄贈された。出水神社に残る資料によると、この能舞台は、昭和 9 年（1934）に旧八代町（やつしろまち）（現

出水神社能楽殿

熊本県八代市本町）の豪商であった弓削家から松井家に寄贈されたものであった。松井家から寄贈された能舞台は、昭和 61 年（1986）に出水神社能楽殿として移築再建された。

⑦水神

ア　烏渡橋際の水神

水前寺成趣園の西側にあり周辺からの湧水が流れる淵に祀られている。自然石に「水神」と刻された石碑が設置されており、背面に昭和５年（1930）８月の記銘がある。

また、烏渡橋際にお堂とその隣に烏（鵜）渡堰の経緯を刻した記念碑があり、銘文から水神碑の設置と併せて建てられたものである。

なお、昭和 57 年（1982）ころに実施された河川改修時に護岸堤防上に移設されている。

烏渡橋際の水神碑

お堂と記念碑

イ　旧砂取細川邸庭園内の水神

旧砂取細川邸庭園北側の崖下から湧水が湧き出しており、その脇に水神が祀られている。安山岩の石柱表に水神、背面に大正七年（1818）九月二十二日と刻されている。料亭「勢舞水荘」があった時期に祀られたと思われる。近隣住民や江津湖を散策する人が落ち葉等の清掃作業を行っている。

旧砂取細川邸庭園内の水神

ウ　上無田（中ノ島）の水神

上無田（中ノ島）の水神

上無田の水神は下江津湖（下江津６丁目）の江津堤下の湖畔に東西 6.0m、南北 4.0m、高さ約 3.0m の石垣を積んだ基壇（神域）を設け、玉垣と注連縄を廻らし、神木にナギやクロマツ（以前は黄金檜葉）が植えてある。基壇左にある石碑の正面には「奉燈　当村　氏子」南側面に「明治二十年亥丁八月吉日」の銘がある。また、基壇入口左の玉垣に「画図町上無田」右に「昭和八年癸酉九月吉祥日建設」とあり、現在地に移され基壇等が整備された明治 20 年（1887）以来守り続けられていることが分かる。また、水神の石碑は無く、木製鳥居に「上無田水神」と墨書きされた扁額が掛けられている。

水神と中ノ島（右奥）

なお、この地域はもと中ノ島まで人家があり、この水神も中ノ島にあったが人家の移設とともに現在地に移されたと伝わっており、加藤清正による江津堤構築の時期に移されたと思われる。

毎年９月 16 日には水神さん祭りが行われており、農区の人たちの神事ののち、地域の子供たちにより子供相撲が行われている。以前は湖畔の神前の広場で行われていたが、現在は江津塘整備により広場が失われたことから、近くの松尾神社の境内に場所を移して引き継がれている。また、宮守（神社の管理などをする人）や地域の人たちにより清掃等が行われている。

（４）歴史的風致を形成する活動

湧水が豊かな水前寺江津湖地区は江戸時代から藩の御茶屋が設置されるなど、水に親しめる「行楽の場」として定着していた。

①舟遊び

■江戸期

熊本藩六代藩主細川重賢（享保５年（1720）～天明５年（1785））の治績や言行をまとめた『銀台遺事』（寛政２年（1790）成立）には、水

前寺成趣園で舟を浮かべていたことが書かれている。すでに江戸時代には藩主の別邸や家老の屋敷が建てられるとともに行楽地として親しまれ、武士を中心とした人々が漁や花火などを行っていた。

■明治～大正期

明治以降は夏目漱石、徳富蘆花一家、与謝野鉄幹・晶子夫妻など多くの文人が訪れ舟遊びを楽しんでおり、文章が残されている。

明治初期の水前寺成趣園
（長崎大学附属図書館所蔵）

『名家の見たる熊本』で、漱石は水前寺と江津湖について「*これが頗る気に入つた。（中略）其処から船を泛（浮）べると、次第に江図湖に近くに随つて景は益々佳くなる*」と述べている。

漱石は五高（現熊本大学）在任中ボート部部長であったことからたびたび水前寺・江津湖を訪れており、先の新聞記事や漱石が水前寺の豊かな湧水を詠んだ俳句（「しめ縄や　春の水湧く　水前寺」）から、船に乗って加勢川・江津湖から見る風景を気に入っていたことが分かる。

現在は一軒も残っていないが、明治期から昭和初期にかけて、一帯には料亭が立ち並び、夏の納涼として舟遊びが行われた。このころ、徳冨蘆花だけでなく、明治 40 年（1907）に発表された与謝野鉄幹らの紀行文『五足の靴』でも、熊本に立ち寄った際に江津湖で舟遊びをした記録が残っている。地域の古老によると、夕方から出る屋形船には芸者が三味線を持って乗り込み、賑やかな舟遊びであったとのこと。

上江津湖での舟遊び（昭和初期）
（絵葉書（熊本百景）より）

下江津湖での舟遊び（昭和初期）
（絵葉書（熊本百景）より）

■現代

現在も上江津湖では明治 10 年（1877）の創業といわれるボートハウスが営業しており、休日には親子連れなどが手漕ぎボートで楽しむ姿がみられる。また、夏の宵には屋形船が浮かび江津湖の風物詩ともなっている。

休日の上江津湖の様子

また、下江津湖には明治 28 年（1895）に熊本大学や熊本高校などが中心となって、ボート競技場が開設され、以前は旧制五高（現熊本大学）旧制七高（現鹿児島大学）との対抗レースが開催されていた。現在は県内大学や高校のボート部の艇庫が並び早朝から練習に励む姿が見られ、毎年夏に「江津湖レガッタ」と称したレースが開催されている。

昭和初期ごろのボートレースの様子

（絵葉書（熊本百景）より）

②湧水を活かした水前寺もやしの栽培

ア　歴史と概要

水前寺もやしは江戸時代から盛んに栽培されており、現在は熊本市中央区出水２丁目の上江津湖にある芭蕉園内の湧水地で栽培されている。普通のもやしの４、５倍の長さ 35 ㎝ほどに成長することから、長寿と健康を願う縁起物として、正月の雑煮に欠かせないもので、収穫作業は正月前の風物詩となっている。

水前寺もやし

その歴史は、『肥後國誌』に「江津川ニ生ス香気強ク珍味ナリ　土俗ハ水前寺苔ト云　公義ニ用ラル清水苔当国ノ名産ナリ此川筋寒中豆芽多賣之」と記されていることから、「豆芽」が水前寺もやしで水前寺苔が生える川沿いで、栽培され売買されていたことがうかがえる。

また、明治 12 年（1879）12 月 1 日現在で各村の状況を調査した『肥

後国託麻郡村誌』の託麻郡今村と託麻郡神水（くわみず）村（現在の江津湖周辺）の物産の項目に「豆蘖　マメモヤシ」とある。これらのことから、江戸時代には幕府への献上品として生産され、その後明治以降も地域の特産品として栽培されてきたことが分かる。

イ　栽培について

作業は 12 月初旬に始める。栽培農家の一つでは栽培地約 300 ㎡に長さ 10m、幅 90 ㎝の苗床を９列整備し、毎年約 100kg の大豆（品種はアソアオガリ）を収穫・選別したものを蒔き、およそ２週間後に 35 ㎝ほどに成長したモヤシ約 5,000 束を収穫・出荷しており、正月の雑煮に欠かせない野菜として栽培地の地域の人々や知人に配られている。また、この作業には 10 数年ほど前から熊本農業高校の園芸・果樹科の生徒たちが草取りや床造り・種蒔き・収穫作業など農家の指導を受けて参加しており、生徒たちが江戸時代から伝わる農法を学ぶとともに、栽培農家も将来に繋いで行くことの大切さを感じながら栽培に励んでいる。高校生が収穫した一部は熊本ねぎや水前寺菜などと共に販売している。

栽培地である芭蕉園

床造り

種蒔き

冠水状態の床

また、毎年１月、近隣の出水南小学校では総合学習（食育）の一環として、５年生児童およそ 135 名が栽培農家の指導を受けて種蒔きから収穫作業を行い、水と命の大切さを学び、収穫した水前寺もやしを食材とした雑煮を楽しんでいる。

③薪能（たきぎのう）

水前寺成趣園は版籍奉還の際に政府に奉還され一時国有地となったが、明治 10 年（1877）の西南戦争で戦場となり荒廃した。その後明治 11 年（1878）に旧熊本藩士で組織される「甘棠会（かんとうかい）」に払い下げられた。その際、「甘棠会」は細川家の歴代当主を祀るとともに、水前寺成趣園の誇る豊かな湧水を後世に伝えていくため、出水神社を創建し、水前寺成就園を出水神社の神苑として寄進した。このとき、祭神となった歴代当主に能を奉納するために水前寺成趣園の南側に能楽殿が建築された。

この能楽殿では、毎年、春と秋に能楽の奉納が行われている。昭和 35 年（1960）に熊本県能楽協会の主催で第１回目の薪能が開催されたことが、昭和 35 年８月７日の熊本日日新聞の記事から分かる。舞台となっていた出水神社能楽殿は昭和 40 年（1965）に焼失したが、昭和 61 年（1986）に能楽殿が再建されるまでは、その跡地に仮舞台を作って薪能は続けられてきた。令和元年（2019）の開催で 60 回目となる。毎年８月の第一土曜日に金春流松融会（こんぱるりゅうしょうゆうかい）により薪能が開催（奉納）され、熊本の夏の風物詩として定着しており、能楽愛好家のみならず多くの市民が幽玄の世界に魅了されている。

薪能の様子

④水神信仰

農業や生活にとって水は最も重要なものの一つである。人々の生活にとって最も重要な水により収穫が左右され、生活が脅かされることから、「水神さん」と呼び親しみを持って守られている。「水神」は田の神と結びつき、田のそばや水路沿いに祀られることが多く、また、日常生活で使用することから水汲み場や井戸に祀られることがある。

水前寺・江津湖一帯は豊富な湧水・水源に恵まれており、水前寺成

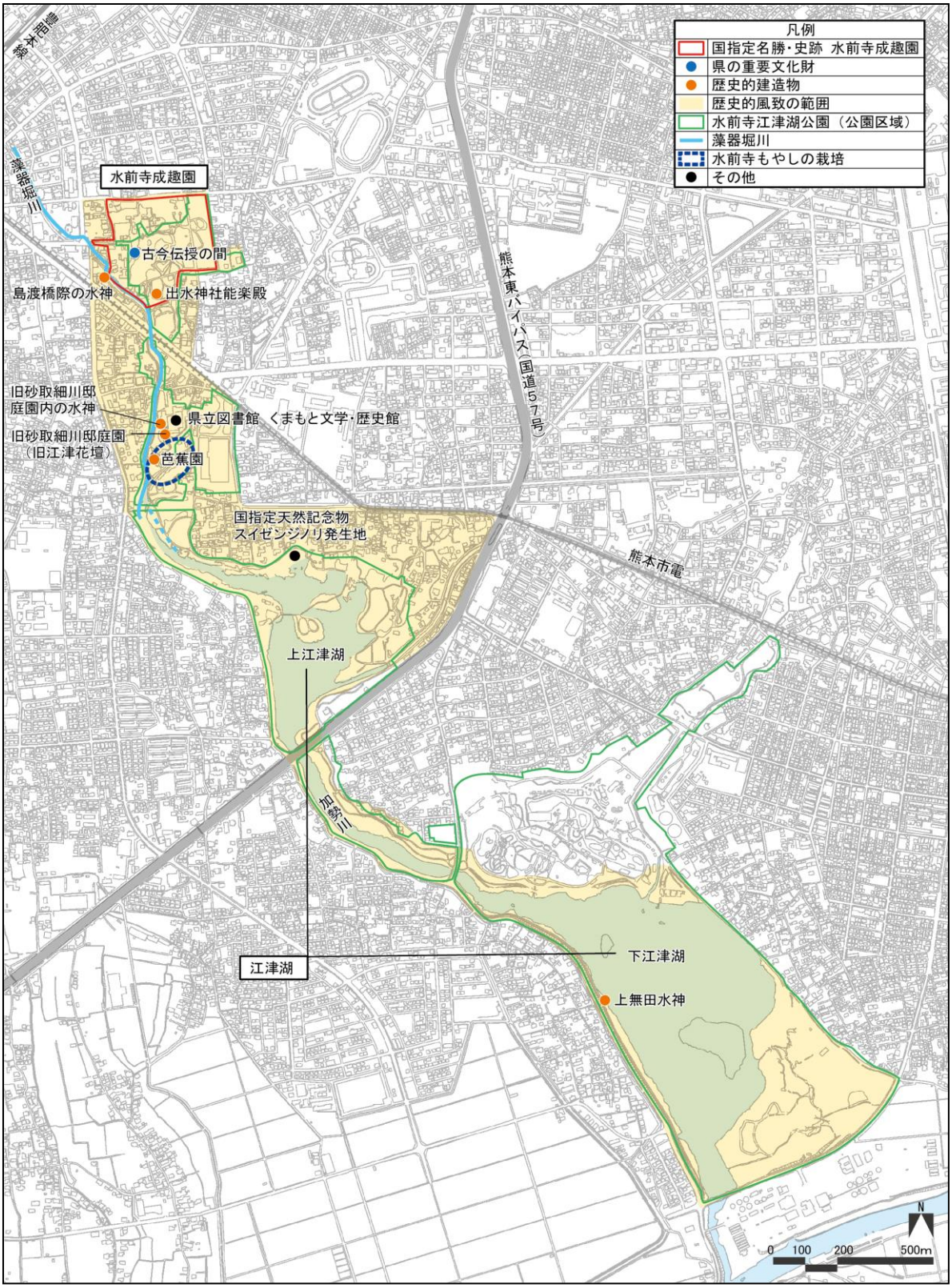
趣園の西側を流れる藻器堀川沿いや旧砂取細川邸庭園の北側、また、下江津湖の東岸と西岸に「水神」が祀られている。

地元関係者への聞き取り調査によると、昭和５年（1930）烏渡堰（うどせき）切開記念の石碑が設置されて以来、現在も毎年「水の日」の８月１日に水神様祭が開催されており、地元自治会を中心に出水神社・消防署職員、出水・砂取校区の近隣の子供たち 50 名ほどが参加し、水神さんや地域の歴史が語り継がれている。また、地域の活性化を図る目的で夏祭りや地蔵祭りも開催され、夏祭りに合わせて、出水神社や地元周辺の有志で組織された水前寺活性化プロジェクトチームや地域住民によって藻器堀川の清掃も行われている。

（５）まとめ

江戸時代、江津湖畔に建てられた藩主別邸等の建物はその痕跡を残すのみとなったものの、水前寺成趣園内の古今伝授の間からは、先人たちが愛でた風光明媚な自然環境を感じることが出来る。そこから藻器堀川・加勢川へと繋がり、江津湖へと注ぐ清流は多くの生命を育むとともに、憩いの場・自然学習の場を私たちにもたらしている。

このような豊かな湧水がもたらす恩恵を享受するだけでなく、この環境を守る清掃活動等も地域住民を中心に続けられており、地区固有の歴史と相まって良好な市街地環境を形成している。



豊かな湧水にみる歴史的風致の範囲

［コラム］文学歴史の散歩道

江津湖は江戸時代から一般庶民の憩いの場であり、肥後の先哲たちが舟を浮べ、自然の風光を愛（め）で、雪、月、花の折々に幾多の詩歌を読んだことからも江津湖の自然や風物が想起される。

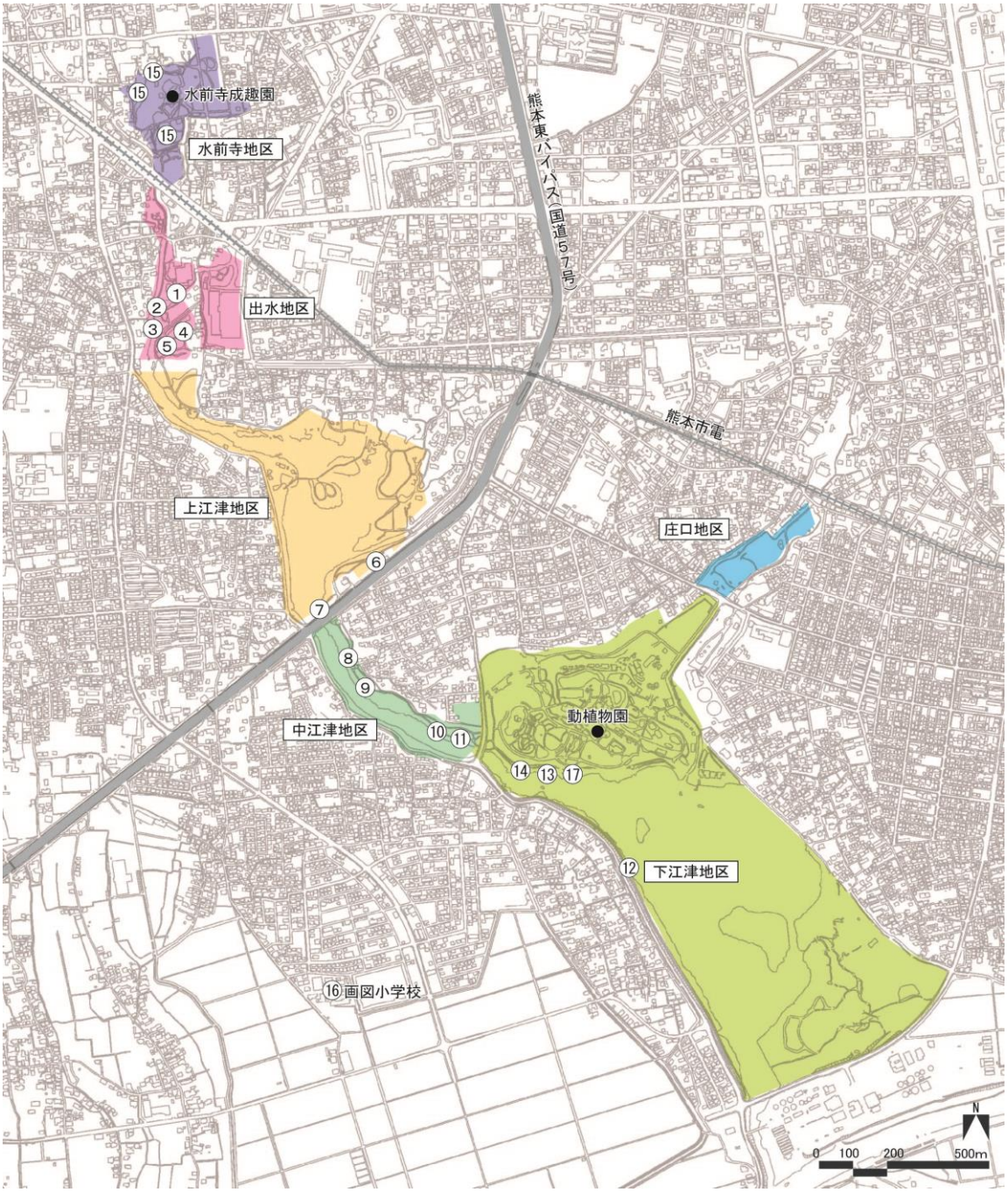
中村汀女（熊本市の名誉市民）は江津湖畔に生れ、湖畔の生家ではじめて俳句を詠み、高浜虚子に師事し、ホトトギスの同人となり、中村汀女の縁により江津湖畔には、高浜虚子や夏目漱石、そのほか多くの歌人・俳人たちの句碑が建てられ文学の道として親しまれている。四季折々の自然や風景を求めて多くの俳句愛好家が個人やグループでの吟行を楽しむ。また、中村汀女の出身校が画図小学校であることから、校区住民の関心も高く「汀女顕彰俳句大会」が開催され、児童たちも参加するなど情操教育などの一環を担っている。また、校内には「汀女園」が整備され、「浮き草の　寄する汀や　阿蘇は雪」句碑が設置されている。

文学歴史の散歩道として設置されている句碑や歌碑は以下のとおりである。

地区		作者	俳句・和歌	設置年
1	上江津湖	内藤（ないとう）　濯（あろう）	いづこかに　かすむ賓なり　ほのぼのと 星の王子の影とかたちと	H17
2	〃	高浜　虚子	縦横に　水の流れや　芭蕉林	S30
3	〃	安部　小壺	産卵の鯉の刎ねをり　江津朧	S57
4	〃	夏目　漱石	ふるひ寄せて　白魚崩れん　許りなり	H9
5	〃	中村　汀女	とどまれば　あたりにふゆる　蜻蛉かな	S60
6			つつじ咲く　母の暮しに　加わりし	S35
7	〃	富永　兆吉	音のよさ　まいっ時　櫓で漕いでくれ	H11
8	下江津湖	綴　敏子	天霧らひ　雪降る湖に　寂かなる 光はありて　鴨ら相寄る	S63
9	〃	有働　木母寺	流れゆく　水葱に照り添ひ　江津の月	H13
10	〃	藤崎　久を	蜻蛉に　空あり　人に汀あり	H2
11	〃	安永　蕗子	はなびらを　幾重かさねて　夜桜の あはれましろき　花のくらやみ	S61
12	〃	高浜　年尾	江津の水　浮藻を流し　止まざりし	S45
13	〃	宗像夕野火	ひるがへる　ときの大きさ　夏つばめ	H13

14	〃	志賀　青研	江津の田の　霞うすうすと　十三夜	H5
15	出水神社境内	夏目　漱石	しめ縄や　春の水湧く　水前寺 湧くからに　流るるからに　春の水 鼓打つや　能楽堂の　秋の水 ※熊本地震により倒壊した出水神社の鳥居の部材を加工して出水神社により、夏目漱石の句のなかから水前寺に因む句を選定し、平成 27 年 11 月に設置された	
16	画図小学校内	中村　汀女	浮草の　寄する汀や　阿蘇は雪	
17	下江津湖	石川　比呂志	一方に　向きて湖面を　濡える 鴨あり首を　風に吹かれて	R2

⑯ 画図小学校内の「汀女園」の句碑
「浮草の　寄する汀や　阿蘇は雪」



文学歴史の散歩道　句碑・歌碑マップ